
日本子ども社会学会 学会ニュース

第17号 (2009/5/15)

日本子ども社会学会事務局

〒658-0001 神戸市東灘区森北町6-2-23 甲南女子大学人間科学部文化社会学科 細辻研究室気付

FAX :078-413-3007(人間科学部事務室) E-mail :jscs@kodomo-cu.jp

U R L : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>

目次

会長から・・・・・・・・・・	1	第15回大会「ラウンドテーブル」報告	9
第16回大会へのご案内	1	事務局からのお知らせ	10
各種委員会からのお知らせ	2	新入会員,住所・所属等変更,退会者	11

会長から

会長 住田 正樹

日本子ども社会学会も15周年を迎え、紀要編集委員会では「子ども社会研究の課題と展望—学際性を求めて—」と題する記念特集を企画し、いま着々と準備を進めています。次回の大会時には会員の皆さまに配布されますが、その成果が期待されます。

ですので、あと5年で20周年ということになります。いよいよ成人期に達しましたので20周年企画も考えていきたいと思っています。既に評議会では、評議員の先生方から「辞典」または「事典」はどうかとの案が数年前に出されました。この案はとくに20周年企画として出されたものではありませんが、そのときは今暫く学会の成熟を待った方がよいのではないかということになりました。しかし20周年ということになれば、企画の一つとして改めて考えてもよいかも知れません。しかしこの他にも本の出版、国際シンポジウムあるいは特定のテーマの公開シンポジウム、他学会との共催記念事業などいろいろな案があるかと思しますので、会員の方々のいろいろなご意見を伺うと同時に、新たに委員会を設置して検討を始めてはどうかと思っています。

この7月に中国学園大学で開催されます第16回大会からは、既にお知らせいたしましたように、新たに「実践報告」部会を設けましたところ、多くの申込みがありました。理論と実践の架橋は本学会発足時からの趣旨でもありましたので、引き続き多くの会員の方々の発表を期待したいと思います。

しかし反面、15年も経てば学会運営について、いろいろな問題も出てきているのではないかと思いますので、会員の皆さまにはいろいろとご意見をお出しいただければと思っています。

第16回大会(7月4日、5日)へのご案内

すでにご案内申し上げておりますが、日本子ども社会学会第16回大会を岡山市の中国学園大学で開催いたします。私たち子ども学部在籍します8人の会員は、現在、鋭意準備を進めております。自由研究発表件数は42件、その中には、本年度から新しく加えました「実践報告部会」2分科会があります。

公開シンポジウム「子ども学部と子ども学に期待するもの」では、すでに全国で80にのぼる「子ども」を標榜する学科に対して、またそのバックボーンである「子ども学(子ども社会学)」への研究者や教育現場からの期待と要望を議論します。ワークショップ3件、ラウンドテーブル数件が予定さ

れています。

中国学園大学の最寄りの駅「JR庭瀬駅」は、岡山駅よりJR山陽本線下りにて2駅目(約10分)、JR倉敷駅より山陽本線上りにて2駅目(約10分)です。宿泊は岡山駅、あるいは倉敷駅付近のホテルが好都合かと存じます(新幹線の便は岡山駅がよい)。

ご多忙とは存じますがふるってご参加下さいますようご案内申し上げます。

＊ JR山陽本線のJR庭瀬駅付近の駅名
(山口・広島方面) ← 「倉敷」 → 中庄 → 「庭瀬」(下車駅) ← 北長瀬
← 「岡山」 → (姫路・大阪方面)

第16回大会発表申込の皆様へ: 大会発表要旨収録用原稿のフォーマットを「日本子ども社会学会ホームページ」にアップしました。本件について文書による案内はございません。ご注意ください。

(文責 第16回大会実行委員長 高旗 正人)

各種委員会からのお知らせ

紀要編集委員会から

2008年度の「子ども社会研究」(第15号)への投稿論文数は23本でした。

厳正な査読の結果、研究論文3本、実践論文2本、そして研究ノート2本を掲載することとなりました。掲載本数は9本でしたが、全体として投稿論文の質はかなり高いものばかりで編集委員の先生方にはかなりのご苦勞があったかと思われます。また、投稿された会員の投稿意欲には真剣さと知的誠実さが読み取れ、それだけに査読委員の先生方も真剣でした。今回も委員以外の会員の先生に外部査読をお願いしました。

ところで、第15号は学会創設15年ということで記念企画を組みました。企画のテーマは「子ども社会研究の課題と展望—学際性を求めて」です。内容は会長挨拶に始まって草創期をふりかえって、さらに特集論文13本とかなり重厚な編集となりました。特集論文の執筆は若手研究者に相応しい、またテーマに誠実に応えた好論文となっています。子ども研究における知の百花繚乱といっても過言ではないでしょう。

会員の皆さまには今年の第16回大会(中国学園大学)にて手にします。学会企画の趣旨をどうぞ斟酌くださり、これからのご研鑽の一助とされますようお願いして止みません。

(紀要編集委員長 望月重信)

研究刊行委員会から

研究刊行委員会は、共同研究事業プロジェクト委員会と連携して、同委員会の研究成果を刊行する活動を行ってきた。2004年に実施された放課後の子どもを対象とした全国調査の結果は、「いま、子どもの放課後はどうなっているのか」(北大路書房、2006年)の形で刊行することができた。同書は評判もよく、現在、3版を重ねている。会員諸氏のご協力に感謝したい。

2008年に、共同研究事業プロジェクト委員会は、中学生を対象としてケータイについての全国調査を実施した。なお、ケータイ問題の研究にあたって、量的と質的とに調査方法を分けた。そして、量的な調査の成果は、20年度の本学会で速報の形で発表した後、「ケータイ、ネットの闇」(「児童心理」金子書房、臨時増刊、2008年10月)にも、概要を掲載できた。なお、質的な分析は現在調査を続行中である。

ケータイ文化は現代の子どもを考える時に避けて通れない重要な問題なので、今回も著作の形での刊行を計画している。早急に出版社と企画をつめ、学会開催時頃に話し合いを持って、8月に原稿渡し、年末の刊行を考えている。

同プロジェクトに参加された先生に執筆を依頼するのはむろんのことだが、この問題は多くの分野からの接近が重要を思われるので、ケータイに関心を持つ会員からの投稿を収録したいと考えている。

子どものケータイについて、執筆希望の会員は、簡単なものでかまわないので、4月15日までに、深谷昌志まで論文の骨子（または、予定している論文名）をお知らせください。可能な限り、執筆をお願いする方向で努力します。文書でもかまいませんが、メール（mss-fukaya@nifty.com）でも結構です。
（研究刊行委員会・深谷昌志）

共同研究事業プロジェクト委員会から

日本子ども社会学会平成19年度学会共同調査の実施と発表、広報について

深谷和子（共同研究プロジェクト委員会委員長）

本委員会は、平成20年度、「生徒のケータイ利用に関する学会共同調査」を実施し、第15回大会（平成20年6月）において結果を発表した。学会HPに調査概要を掲載し、調査報告書を関係各方面に送付した。なお、金子書房：「児童心理」2008年10月臨時増刊号「ケータイ、ネットの闇—子どもの成長への影響を考える」の巻末に、文科省、警察庁、内閣府等によって実施された調査と並んで、結果の概要が掲載された。

なお、「学校裏サイト」に関する研究班（代表：山縣文治、共同研究者 井上信次・小針誠・田川隆博・中田周作・松下一世）の調査研究の結果は、とりまとめ中であり、3月末に報告書が学会HPに掲載される予定であるので、それを参照されたい。

「生徒のケータイとネット利用、『学校裏サイト』に関する調査報告書」概要

深谷和子（東京成徳大学特任教授）・高旗正人（中国学園大学教授）

1. 調査概要

○調査対象：①全国公立中学校11,000校を1/20抽出し、550校に学校調査を依頼、43都道府県179校より回答を得た（回収率32.1%）。②学校調査179校のうち、生徒調査への協力が得られた27都道府県の61校の中学2年生2222名（男子1161名、女子1061名）を対象に生徒調査を実施した。

○調査実施期間：平成20年2月～3月

○調査担当者 深谷和子・高旗正人・深谷昌志・須田康之・西本裕輝・三枝恵子

○調査内容①学校調査：裏サイト開設状況（推定）、学校としての対応とその必要性、監視状況、裏サイト関連のトラブル、生徒のケータイ利用（推定）、その他

②生徒調査：ケータイ所持率、ケータイ機能の利用状況、HPの立ち上げ率、クラスや学校の掲示板の開設率、裏サイトへの関心、ネット攻撃にあった体験、傷つき体験とその回復、ネット攻撃をした体験、その他

2. サンプルの属性

1) 学校調査

表1 回答者

校長 その他	教頭	教務主任	
30.2% (54校) (47校)	35.8% (64校)	7.8% (14校)	26.3%

表2 学校所在地の特性

大都市	13.0% (23校)
中都市	24.9% (44校)
小都市	27.1% (48校)
農村・漁村	20.9% (37校)
その他	14.1% (25校)

表3 学校校への持ち込みへの対応

禁止	98.3% (174校)
往復や塾の行き帰りには黙認	1.1% (2校)
とくに指導せず生徒にまかせている	0.6% (1校)

表4 裏サイト問題に対する学校としての対応

学校として対応している	66.1% (117校)
特に対応していない	33.9% (60校)

()内の数値は学校数

2) 生徒調査

表5 不登校傾向(学校へ行きたくないと思うこと%)

	よくある	時々ある	あまりない	全然ない
男子	16.9 (193)	37.4 (428)	28.1 (321)	17.6 (201)
女子	20.8 (219)	43.7 (460)	25.0 (263)	10.5 (110)
全体	18.8 (412)	40.5 (888)	26.6 (564)	14.2 (311)

(カッコ内は実数)

表6 地域

	大都市	中小都市	農山村	その他
男子	5.3 (60)	52.1 (590)	36.0 (408)	6.6 (75)
女子	5.7 (60)	52.1 (544)	37.0 (384)	5.2 (54)
全体	5.5 (120)	52.1 (1134)	36.5 (795)	5.9 (129)

3) 生徒調査の要約と結論:

なお、巻末の4)資料に掲載されていない表は、全て学会のHPよりダウンロードできる。

<ケータイとネット利用>

- 1) ケータイ所有率は、男子 43.6%、女子 58.9%
- 2) ほとんどすべての項目で、男子生徒より女子生徒がケータイ、ネットをよく利用しており、ケータイ・ネット問題とは「女子問題」であるとも言える。
- 3) ケータイ・ネット利用は、部分的に地域差は見られるものの、大都市、中小都市、農山村間での数値の差は予想より小さい。しかし大都市の女子に特有の傾向が見られる。
- 4) ケータイやネット利用は、生徒の不登校傾向(学校忌避感情)と関連がみられる。

不登校傾向のある生徒は、このツールによって展開される世界に関心を持ち、楽しみを見出しているかに思われる。(表24)

<「学校裏サイト」への関心とそこでの攻撃>

- 5) 健康な生徒にとっては、裏サイトの誘因力はそれほど大きくなさそうである。

日本中に学校裏サイトが林立し、それに生徒が関心を持ち、アクセスし、それによって生徒がみな心に傷を受けているかのような報道は、現実を正しく反映しているとは言えない。

本調査のデータによれば、クラスや学校に現在掲示板があると云っている生徒は17%でしかなく(表12)、昔あったも含めて2割。生徒の関心もそれほどではなく(表13)、掲示板の書き込みによって攻撃(学校裏サイトによる誹謗中傷)された経験のある者も1割である。(表15)。

- 6) 攻撃者が特定できるかには地域差があり、大都市のほうが特定され難いため不安も高いと思われる。また、攻撃された者についてみれば、「とても傷ついた」とする者は2割(表18)。また攻撃が現在も自分の性格にネガティブな影響を残しているとする者も14%。(表20)。以上は、どれも女子と不

登校傾向者に数字が高い。

7) 掲示板に悪意の書き込み(悪口)を「今も時々している」者は3%に過ぎない。(表 21)

8) 不登校生徒のプロフィールを巻末に示した(表 23、24)。

9) 以上を総合すると、裏サイトに関心を持つ者やそこで攻撃されてダメージを受けている者は、世間で行われているよりはるかに少数で、多くの生徒は性格の健康性、弾力性(レジリエンス)をもった存在であり、こうした状況に自分をかかわらせないでいるか(自己を護っているか)に見受けられる。しかし、女子や一部の傷つき易さをもつ者にとっては、ネット世界は看過できない悪意の侵入を許していると思われる。これを<ネット弱者(ネットによって悪影響を受けやすい層)>と名付けるなら、こうした層にとりわけ十分な配慮が必要であろう。

4) 資料(報告書より抜粋)

*以下は全て統計的に有意

1) 利用状況

表7 ケータイで電話とメールのどちらを多く使うか

	殆ど 電話	電話が 多い	同じ位	メール が多い	殆ど メール
男子	2.8	6.7	16.0	56.1	18.4
女子	1.1	1.8	14.4	56.4	26.4
全体	1.8	4.0	15.1	56.3	22.9

*ケータイの今はほとんどメール機能の利用

表8 ケータイで一番メールする相手

	家の人	友だち	それ以外	使わない
男子	3.8	88.3	3.8	2.3
女子	4.1	90.9	4.2	0.8
全体	4.0	89.7	4.1	2.3

*メールする相手はほとんどが友人

表11 自分のHPや掲示板をもっているか

	HPがあり よく更新する	殆ど更新しな い(+中止)	HPを もっていない
男子	6.4	12.1	81.5
女子	24.6	18.9	56.4
全体	15.1	15.4	69.5

*女子がHPや掲示板をよく利用する

表11-1 HPを開いていて<よく書き込んだり更新する>×地域

	大都市	中小都市	農山村
男子	8.3	7.7	4.2
女子	35.0	24.5	24.8

*とりわけ大都市の女子がHPを開いている

表 11-2 HPを開いていてよく書き込んだり更新する×不登校傾向

	<男子>			<女子>		
	よくする	更新せず	開いていない	よくする	更新せず	開いていない
不登校傾向	12.6	20.9	66.5	31.5	24.1	44.4
多少ある	6.4	11.1	82.5	24.2	18.5	57.3
ない	4.3	9.7	86.5	21.2	16.9	61.8

*不登校傾向のある生徒がHPをよく開いて、更新している

表 12 クラスや学年に現在掲示板があるか

	今もある	昔、あったが つぶされた	知らない
男子	13.9	4.4	81.8
女子	21.2	5.1	73.7
全体	17.4	4.7	77.9

*世間が思うほどは掲示板は多くなさそうである

表 13 悪口を言い合うサイト（学校やクラスの裏サイト）があったら

	積極的に 参加したい	時々覗いて みるだろう	一度位は覗い てみるだろう	関心がないの で見ないだろ う
男子	3.8	18.8	20.2	57.1
女子	3.2	30.1	31.4	35.2
全体	3.5	24.2	25.6	46.7

*それほど裏サイトへの関心は高くない。

表 13-1 悪口を言っているサイト（学校裏サイト）への関心×地域

<積極的におしゃべりに参加したい・時々覗いてみるだろう>%

	大都市	中小都市	農山村
男子	20.0	24.9	20.6
女子	46.7	33.2	31.9

*大都市の女子が関心をもっている

II) ネットによる攻撃とそのダメージ

表 14 掲示板の書き込みが（他人事でも）不愉快だと思うことがあるか

	よくある	たまにある	ない	掲示板を見た ことがない
男子	5.1	15.1	22.1	57.8
女子	9.7	27.2	17.4	45.8
全体	7.3	20.9	19.8	52.0

*不愉快な書き込みを目にした生徒はそれほど多くない

表 15 掲示板の書き込みで自分が攻撃された経験

	ある	ない
男子	5.9	94.1
女子	13.7	86.3
全体	9.6	90.4

*女子が多く経験しているが、全体では1割弱

表 15-1 掲示板で攻撃された経験が<ある>×地域

	大都市	中小都市	農山村
男子	12.1	6.2	4.2
女子	24.1	11.6	15.5

*大都市で起こっている問題か

表 15-2 掲示板で攻撃された経験がある×不登校傾向

	<男子>		<女子>	
	ある	ない	ある	ない
不登校傾向	12.2	87.8	22.2	77.8
多少ある	5.7	94.3	13.8	86.2
ない	3.7	96.3	9.0	91.0

*不登校傾向のある子に攻撃された経験者が多い

表 16 攻撃された経験がある人は、誰から攻撃されたか分かったか

	絶対あの人だと見当がついた	多分あの人だろう(はっきりしなかった)	全く分からなかった
男子	42.9	16.9	46.2
女子	47.9	36.8	29.9
全体	41.2	29.9	24.0

*男子に相手を特定できない生徒が多い

表 17 攻撃されて誰かに相談したか

	先生に	親に	友だちに	相談せず
男子	7.8	7.8	22.1	62.3
女子	3.6	5.5	54.5	36.4
全体	5.3	6.4	41.2	47.2

*男子は相談しない者が多い。女子は仲間に相談している。

表 18 攻撃されて傷ついたか

	とても傷ついた	少し傷ついた	殆ど傷つかなかった	全く傷つかなかった
男子	16.5	20.3	11.4	51.9
女子	21.1	33.1	21.1	24.6
全体	19.5	28.5	17.6	34.4

*女子のほうが傷ついたとする者が多い。

表 18-1 攻撃されて<とても傷ついた>×地域

	大都市	中小都市	農山村
男子	20.0	20.5	5.0
女子	33.3	16.1	22.8

*大都市女子の傷つきやすさが見える

表 19 不愉快な書き込みに抗議するか

	その都度書き込む	時々抗議する	放っておく
男子	16.7	28.6	54.8
女子	13.3	23.1	63.6
全体	14.5	25.1	60.4

*抗議せず、放っておく生徒が多い

表 20 メールでの攻撃が現在の自分の性格に影響しているか

	自信をなくした	立ち直った	すぐ忘れた
男子	8.4	21.7	69.9
女子	17.1	32.9	50.0
全体	13.9	28.7	57.4

*現在まで影響を残している者は1割強。女子に多い。

表 20-1 攻撃されて自信をなくした×不登校傾向

	<男子>			<女子>		
	自信を無くした	もう立ち直った	すぐ忘れた	自信を無くした	もう立ち直った	すぐ忘れた
不登校傾向	23.1	19.2	57.7	28.3	26.1	45.7
多少ある	1.0	34.5	65.5	8.1	41.9	50.0
ない	3.7	11.1	85.2	1.8	7.3	90.9

*不登校傾向のある生徒に影響が残っている。

表 21 掲示板に人の悪口を書き込んだ経験

	今も時々書いている	一時書いたことがあるがやめた	一度もない
男子	2.6	7.6	89.8
女子	3.8	9.5	86.7
全体	3.2	8.5	88.3

*そうした書き込みを今もするのは5%以下で一部の生徒に過ぎない。一時書いてもやめた者を合わせて12%である。(以上)

研究交流委員会から

本委員会では、会員の研究交流を深めるために、①各地区の研究会の開催と②大会時の研究交流の為の企画（ワークショップ、ラウンドテーブル）を行なっています。

①に関しては、下記のように、関東地区研究会を開催しました。

テーマ：子どもをめぐる言説/【報告者】望月重信（明治学院大学）ポストモダンの視点から/ 大倉健太郎（玉川大学）教員養成の視点から/樋田大二郎（青山学院大学）子どもをめぐる言説のはたらき/【司会】武内清（上智大学）

②に関しては、大会時に、ワークショップを1つ、ラウンドテーブルを1つ、研究交流委員会企画で開催します。

A ワークショップ

テーマ： マナーと人間形成について/ 司会 加野芳正（香川大学）/ 発表 加野芳正（香川大学）/ 村上光朗（鹿児島国際大学）/ 松田恵示（東京学芸大学）/ 指定討論 伴 恒信（鳴門教育大学）

B ラウンドテーブル

テーマ 子ども時代の体験の意味—その後への影響をめぐる/司会 武内清（上智大学）/ 発表 森真理（武庫川女子大学）/内山絢子（目白大学）/浜島幸司（新潟大学）

（研究交流委員会（長）・ 武内 清）

日本子ども社会学会 第15回大会 「ラウンドテーブル」(報告)

テーマ：ビデオ援用に基づく実践と研究の対話

保育者の語りに見る専門的見識

コーディネーター 中坪史典（広島大学）

司会者 藤田由美子（九州保健福祉大学）

話題提供者 中坪史典（広島大学）

岡花祈一郎（広島大学）

指定討論者 小田豊（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

日々幼児と関わる保育者の行為は、瞬時の状況判断であり、文脈依存的である。おそらく保育者は、眼前の幼児の表情や動き、保育者の中の「その子」の理解、類似の状況における過去の経験などを駆使しながら、援助したり、見守ったり、言葉をかけたりするのだろう。こうした保育者の専門性について、ビデオカメラを用いることで、具体的に記述することはできないだろうか。これが本研究の出発点である。

第一に、岡花祈一郎氏（広島大学）が話題提供を行った。研究者が保育者の語りを引き出す刺激(cue)として「映像」を用いることで、保育者の専門的見識を言語化する試みであり、Tobin, Wu & Davidson (1989)、野口・小田・芦田・門田・鈴木・秋田(2005)によって実践される多声法的ビジュアル・エスノグラフィーの手法を用いた研究である。ビデオカメラを記録媒体としてではなく、語りを引き出すツールとすることで、保育実践の背後に接近することを目的としたものである。

第二に、中坪史典氏（広島大学）が話題提供を行った。研究者と保育者の協同作業を通して映像記録を編集し、保育実践の「エスノグラフィック・フィルム(Ethnographic Film)」を作成することで、保育者の声に即した研究を模索するとともに、映像実践を媒介とすることで、従来の「研究する-される」の関係とは異なる、新たな研究者と保育者のコラボレーション・モデルの可能性を検討することを目的とした。

その後、参加者(フロア)と話題提供者の間で、質疑応答など、活発な討論が展開された。最後に、指定討論者の小田豊氏（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）がコメントを提示した。特に、研究方法としてのビデオカメラの援用については、ビデオはツールと位置付けながらも、いつの間にか目的化してしまうことの危険性や、「そもそもツールとしてのビデオとは、どういうことなのか?」「ツールとしてのビデオは、一体何をもたらすのか?」といった問いが厳しく突き付けられた。今後、ビデオ援用に基づく実践と研究の対話を検討する上で、根源的な問題を今一度確認することの重要性を明示させるものであった。

※上記は、ニュース16号の原稿として広報委員会宛に送られたものですが、システムのトラブルにより同号に掲載できませんでした。関係の会員各位、会員の皆様に謹んでお詫び申し上げます。

(広報委員会)

事務局からのお知らせ

(1) 学会費納入

本年度（平成 21 年度）の学会費を、郵便振替にてお納めください。学会費を滞納されますと会員資格が失われます。口座番号等は次のとおりです。なお、通信欄には必ず何年度の学会費かをご記入ください。

```

////////////////////////////////////
\ 口座番号      0 1 7 6 0 - 1 - 8 5 0 4 8
\
\ 加入者名     日本子ども社会学会
////////////////////////////////////

```

(2) 会費

平成 13 年度より会費が値上げされています。学会費振込みの際はご注意ください。

```

<<////////////////////////////////////>>
\                               正会員 7,000 円、 学生会員 4,000 円、 団体会員 10,000 円
\
<<////////////////////////////////////>>

```

(3) 学会入会手続き

本学会へ入会を希望される方は、学会事務局（住所は 1 頁参照）まで、切手を添付した返信用封筒を同封の上、ご連絡ください。事務局より必要書類をお送りいたします。入会される場合、入会申込書に必要事項をご記入の上（現学会員の推薦が必要）、会費（入会年度のみ、入会金として上記の会費に 2,000 円を加えた額）を郵便振替にて納入してください。

また、本学会 HP(1 頁参照)より入会申込書をダウンロードして、記入したものを送っていただく方法もあります。

(4) 住所・所属等の変更

住所、所属、電話番号等に変更があった場合、必ず学会事務局へお知らせください。これらの変更について『学会ニュース』にてお知らせする場合、原則として所属機関は掲載し、自宅住所は希望される場合のみ掲載といたします。（次号よりそのようにします）。また、退会される方も、必ず学会事務局へお知らせください。いずれの場合も、電話ではなく**葉書や FAX、E-mail**等の書面にてお願いします。

(5) 『子ども社会研究』創刊号の販売について

『子ども社会研究』は、現在、14 号まで発刊されていますが、創刊号はすでに品切れとなり、入手困難な状態になっておりました。そこで、皆様のご要望により、『子ども社会研究』創刊号を再版いたしました。購入希望の方は、下記の要領で郵便振替にて紀要代金（1 冊 2,000 円）と送料をお振込みください。また、その他の号の販売も受け付けております。送料等、詳しくは、学会 HP をご覧ください。

口座番号	0 1 7 6 0 - 1 - 8 5 0 4 8
加入者名	日本子ども社会学会
通信欄	<u>「子ども社会研究」第〇号代金および送料として</u>

(6) 献本

杉本 厚夫、高乗 秀明、水山 光春 著

『教育の3C時代—イギリスに学ぶ教養・キャリア・シティズンシップ教育—』

2008年11月 世界思想社 2000円

—事務局から—

事務局では『大会プログラム』に掲載する広告を募集しています。広告掲載を希望する出版社等をご存知でしたら、ご紹介ください。（*次年度の大会プログラムになります）

〒658-0001 神戸市東灘区森北町6-2-23

甲南女子大学人間科学部文化社会学科 細辻研究室気付

FAX : 078-413-3007 (人間科学部事務室)

E-mail : jscs@kodomocuo.jp